

まだない未来？

～ジュネーブ・モーターショーから垣間見えたもの～

2013/04/18

コラム

菊川 人吾

国際環境経済研究所 主席研究員



来る4月21日から、国際見本市として格上げされている上海モーターショーが開催されるが、それに先立ち、3月7日から筆者の滞在するジュネーブにて開催された100年以上の歴史を誇るモーターショー^{注1)}を振り返りつつ雑感を述べたい。

3月8日付日経BPネット^{注2)}では「高性能車よりエコカー？販売不振が続く欧州で自動車ショー開幕」との見出しでジュネーブ・モーターショーを紹介している。しかし、実際に自分自身も現場へ数回足を運び（自動車に関しては素人で一般的な感覚で）率直に言えば違和感のある見出しと感じた。（全体の様子は写真1）。



(写真1)

もちろん、フェラーリ初のハイブリッド車「ラ・フェラーリ」（写真2）が開幕当初からの注目を浴びていたことを考えれば、引き続き「エコ」がテーマの一つであったことは間違いない。しかし、主要な自動車メーカーのブースを見て回るに、昨年のジュネーブ・モーターショーで多く見かけた燃費比較のパネル等は目立っていなかった。個人的な印象の域を出ないが、昨年大々的に電気自動車の充電器と家電製品とのリンクを展示していた三菱自動車は、今年も同様の展示をしていたもののその規模は縮小されていた一方、ワゴンタイプの中型車の陳列により多くのスペースを割いていた。ホンダもメインの展示はシビックの新型ワゴン（コンセプトカー）（写真3中後ろに見える車体）であり2014年の欧州市場投入を睨んでの展示であった。そうした展示の様子からは、1月15日付日経電子版^{注3)}が伝えている「高級「アメ車」が再び主役にー北米自動車ショー」という見出しの方がトレンドを捉えていたように思える。



(写真 2)



(写真 3)

ジュネーブ・モーターショーへの出展に関与した自動車メーカー関係者何人かにそうした感想を述べたところ、「エコはもう当然の必要条件であり、むしろ、車本来の楽しさや次のテーマを押し出していく時期」といった反応があった^{注4)}。確かに、比較的各社が注力していた中型車の類のラインアップは非常にワクワク感を醸成していたように感じる。今から 15 年以上前の 1997 年にプリウスを発表^{注5)}したトヨタが今回展示場のど真ん中に展示した「i-Road」(写真 4) は一つの方向性を示しているともいえよう。ヨーロッパ特有の街中の小道をスイスイと優雅に駆け抜けるイメージビデオも流されていたが、一つの生活スタイルを提案しているようであった。



(写真 4)

4 月 21 日から開催される上海モーターショーのテーマは「革新?美しい生活」。一方、11 月に開催される東京モーターショーのテーマは「世界にまだない未来を競え」^{注6)}。いずれのテーマにも「クルマ」という文字は出てこない。革新的な美しい生活とは、「クルマのない世界」というものに、「まだない未来」を暗示しているのか、双方のアジア発のモーターショーが「エコ」を超える次のテーマを叩きつけてくることを期待してやまない。

※本文中、意見にかかる部分は筆者の個人的見解であり、所属する組織等を代表するものではない。

<参考>

- 注1) Salon International de l'Auto。いわゆるジュネーブ・モーターショーのこと。1905年から開催されている。
- 注2) <http://www.nikkeibp.co.jp/article/matome/20130307/342932/>
- 注3) http://www.nikkei.com/article/DGXNASGM15027_V10C13A1000000/
- 注4) ジュネーブ・モーターショーの直後3月18日にジュネーブ日本政府代表部大使公邸にて、日系自動車企業支援のため、各国の大使や国際機関の幹部の参加を得たレセプションが開催された。筆者は当該レセプションに関与する機会を得ておりその際に関係者との意見交換の機会を得たもの。
このように政府が自動車を展示して企業支援のためのレセプションを開催するケースはあまり無いようで初回となった昨年と今年も引き続き自動車専門紙でもその様子は取り上げられた（記事（[昨年](#)、[今年](#)）及び写真5～8参照）。
- 注5) <http://www.toyota.co.jp/jpn/company/history/>
- 注6) 前回2011年の東京モーターショーのテーマは「世界はクルマで変えられる」、前々回2009年は「クルマを楽しむ、地球と楽しむ」であった。



(写真5)



(写真6)



(写真7)



(写真8)